214
特218
358

工學博士 田中龍夫 著

科學より神への道

始

特218
358

工學博士 田中龍夫著

科學より神への道

昭和八年一月五日 帝國圖書館

○キユーリ夫人

凡そ科學と云へば、男の仕事の如く考へて居つた時代、茲に突如として女性の身を以て、科學に沒頭した女傑が現はれた。而もその探究の結果、發見されたラヂウムが、物質界にからむ千古の謎を解くに至つたことは、誠に驚歎に値する。かの歐州の大戰に際しては、第一線に出で、負傷兵の看護に從事された祖國愛に燃えた女性である。

○J・J・トムソン教授

キユーリ夫人が、化學の畑から、物質界の根本問題を探究せる間に、J・J・トムソンは、之を物理の畑から究明した偉人であつて、物質の根本が、遂に陰陽の電子の活動狀態たる所以を突き止めたのも、實にトムソン教授の研究に依つたところが多かつた

巻頭一言

富士山下に、一百の同志と共に勵むべく　**天地人を貫いて神への道**　の一文を草した。之に、東邦電力に於ける　**電氣と人生**　並に海軍省に於ける　**科學道より出發して**　の二回の講演を加へて　**科學より神への道**　と題して、富士修養會の開催を紀念して、此一書を世に送ることになつた。

第一なるものが、余輩の問はんとする本領であれば、第二はその科學的の基礎工事である、而して第三なるものが、科學を貫いて、哲學宗教並に社會問題に對する決論である。尙詳しい事は、拙著「**科學の革新と哲學及宗教**」を見て貰へは判ることであつて此書に對する文部省の伊東學生部長の最近の御書翰は、別記の通りである。

今日は何と云つても、全世界を通じて科學文化謳歌の時代である。而して科學主義が、物質萬能の大波に溺れ、物質史觀の暗礁に乗りあげて居る時に、科學主義を

貫いての、更に高い物心擧揚の精神主義は、これこそ、正に　救ひに船　であらねばならぬ。

余輩は同志と共に、十年間、此主義主張の下に戰つて來た。之を大學の哲學者に問ひ、之を內外の名僧智識に問うて今日に至つた、而して天上天下、之を措いて、他に人心の思想確立の道なきを、確信するものである。「日本は神國であり　我等は神の子であり孫である」現代の世界を包被せる、科學主義を貫いて、光明赫々たる恩愛の神への先達が、いとも微なる余輩の任務である。

茲に、皇天の神の恩惠と、敎友諸氏の共鳴の下に、一百を越えた同志と勵まんとするに際し、余輩は何處までも本書の趣旨の徹底せん事を期して戰ふ、而も面と向つては、百人以上の友と、膝つき合せ語ることが出來ぬ。余輩は此一書が、白衣の天使として、富士山下より、日本全國に飛び出して、愛の祖國の青年男女の懷に宿らんことを、祈願して止まざるものである。

昭和八年七月廿日

東京修養社にて　田中龍夫

文部省伊藤學生部長の書翰

拜啓仕候　酷暑の折柄　如何御起居被遊候哉伺上候　扨先日は罷々御來訪を忝ふし又貴著（科學の革新と哲學及宗敎）拜見致し　有難奉存候　其後多忙に打紛れ　又身體も病後の爲　讀了も延引致居、數日前　全部拜見仕候。

實に有益なる御高見　小生としては　共鳴する處　眞に多きと共に　又御敎示を愛けし事多大に有之　從來　漠然たりし見解も　明瞭なる基礎を得たる心地致され候。

自然科學　特に物質論の進步　それが實在の眞相を眞に明白になし得る時こそ　二元に分たれたる哲學と自然科學とを　合體融和せしむる時にて　そこに一元的なる眞實在を發見し　之によりて　眞の意味の人生觀・宇宙觀も生れ　又我國體の精華も闡明せらるゝ事　疑なしと存候。

此方面に　將來の學內の進步の大領域を發見すべく　文化創造の境地も　茲に存する

を覺え申候。

方今思想善導の事　極めて至難の事業に有之候も　之を貫くの道は　唯々古に歸る事に非ず　まさに一段の創造進展を爲す可き事　豫て小生も考居候事柄　貴著によりて更に明白に之を確め申候。

當今　學者　多くは　自己の狹き專門に立籠りて　廣く全體をつかむ經綸少し　心を大にして更に實在の眞より出發する氣宇なき折柄　貴著の如きが　廣く讀まれ　汎く志ある人の共感を得る事　極めて望ましく存候　取敢ず以書面　御禮旁〻感想申述候　いづれ其の內　一度御面謁致し　又色々御高話承り度存候　時下酷暑の折柄　御養生專一に祈居候。

昭和八年七月十八日

拜具

伊東延吉

目次

天地人を貫いて神への道 ……七

天界の驚異——天文の知識——天の河の姿——天の河を越えて——春の大交響樂——生命の問題——生命の本尊——萬物同根——日本人には無神論なし——（神道に基督を接げ）

電氣と人生（唯物史觀より唯電史觀へ） ……一七

上

日本宗教大會——物質主義の弊害——思想國難——科學と宗教——機械文化より電氣文化へ——唯物主義とは何ぞや

中

眞空管の研究——エッキス線の出現——三體以外の或物——ラヂウムの發見——ラヂウムの廢滅——ラヂウムト電氣——物質と電氣——元素の姿——科學的世界

觀の變革——生物と無生物——水の構造——萬物の活動
下
物的思想より電氣的へ——宇宙一貫の大生命——共存共勵の實行——唯物史觀より唯電史觀へ——(共產主義者の轉向)
科學道より出發して……六七
上
第一に日本人——第二に海軍の人——科學の人——物質不滅論——唯物史觀の吟味——科學主義を貫いて——宗教々育——二頭を遂ふもの——大事の相談——機械文化より電氣文化へ——電氣の世の中——十九世紀の機械的世界觀
下
十九世紀の半端の科學——社會科學より物理學へ——思想的に纏まらぬ科學——單純偉大なる宇宙觀——宇宙生命力——大生命の親を求めて——天道より人道へ——敬神愛人の道——(Te Inocracyより Electrocracy へ)

天地人を貫いて神への道

◇天界の驚異

秋の夕べ、燦然として輝く星を見たものは、誰しも一種の不可思議の感に打たれないものはないのである。かの七夕の夜、天の河のほとり、河の東の織姫星と、河のあなたの牽牛星とが、互ひに想ひをこがし、鵲の渡せる橋を渡つて、一年一邊相會ふの期を惠まれたとの古傳說の如きは、よくも天界に祕める人情味を表現して居る。

「鵲の渡せる橋におく霜の　白きを見れば夜ぞ更にける」

何人も一度、天を凝視した人は、大宇宙の神祕に打たれるのである。古の聖詩人

は歌うて言うた。「諸々の天は、神の榮光を顯はし、大空はその聖手の業を示す」（詩篇十九篇）と。どなたかの大なる御心がないなれば、兎てもかく整然たる天界の姿を見ることが出來ない事に氣がつく。

◇天文の智識

此の偉大なる天に對する智識も、近來の學問で、非常に變つて來たのであつて、昔は大地は不動であつて、天が動くと考へられて居つた。太陽諸共、天が一晝夜にして一大回轉をすると考へて居つた。然るところ近代になつて、實は我等の大地は、太陽の周圍を運行しながら、一晝夜に一回、自分で轉々と廻るのだと云ふことが分つて來た。太陽の周圍を水星と云ふ星が廻り金星が廻り、その外を我が地球が廻る、それから地球の周圍をば、十三七つのお月さんが廻る。地球の外を、火星木星土星が周り、その又外を天皇星と海王星がめぐり、又その外に冥王星なるものが繞つて

居る事が最近發見された。

◇天の河の姿

即ち我等の天界は、太陽を中心とする一大家族であることが分つて來た。そして又太陽それ自身は、幾億千萬の他の恒星と共に、一大星團をなして居るのであつて、その星團の大體の形は、楕圓形のお煎餅のやうであり、その稍、中心に我が太陽は懸つて居る。かの天の一方より天の他方にうねつて流れて居る天の河こそ、我等の星團の端を示すものであつて、天の河と見えしは、實は星が密集して見えるのであつて、之に望遠鏡をさしむけた日には、その一分子一分子が、わが太陽に匹敵すべき恒星であつて、或るものはわが太陽の一萬倍も大きなものがあると聞いて喫驚仰天せざるを得ない。

水もなく　さえわたるかな天の河

岸の星子は　雨とふるとも（龍夫）

◇天の河を越えて

而も我等の大星團なる銀河系も、之に匹敵すべく無慮幾千萬の火星團なる星雲も、天界の一方に、金縛りされて、ぐる〳〵と回轉して居るのではなくて、實はこれが、生命的の運動をなせる事さへ發見された。即ち我が銀河系の外なる星雲は、一秒間一萬キロメートルにも餘る速度を以て、我等の銀河系から遠ざかつて行き、ザット十億年には、二倍の大さになる割合だと。（修養卅二號山本博士の說參照の事）而して擴がり行く宇宙の運命は如何。擴がつて行く大宇宙は、又いつしか縮んで來るとアインスタインは云うて居る。十億年の長い歲月の如きも、大宇宙から見れば、實に一息にも足らない、否々實は十億年が一息であるかもしれない。

蓮華の花が　開いた　開いたと思つたら　いつの間に蕾んだ！

これは單に、生命に充ち溢れた、七つ八つの幼女の、お手〻をつないでの、遊戯の姿のみではない、大宇宙が實に、開いたり蕾んだりして、生命的の大呼吸を營んで居るのである。

◇春の大交響樂

春になると野も山も、新綠の姿をなして我等の前に立つ。殊に東北の野の如きは、雪が消えると同時に、梅も桃も櫻も皆さいて、春は宛も潮の如くに、一時に押し寄せて來る。

梅もゝ櫻　青き柳をこきまぜて　いまし織らなむ　春の錦を

たとへば何處にても、一度心して春の野を廻つて見れば、たんぽゝと菫、菜の花と蓮花草、色とり〴〵に虫を誘うて居る。雀は軒端に頰白は森に囀り、雲雀は高く麥野の上に囀る。その調和、その統一、その生々發達、宛も天然の大交響樂の如し。

若し何人でも、一切の思ひ煩ひをすて、一切の偏見を去つて、此の大地の大音樂場に身を置くとき、我等の恵まれたる大地が、實に生命を以て充ち溢れて居ることを直感するであらう。春然り夏更に然りである。

◇生命の問題

いのち と云ふ事は、いきのうち、と云ふことであるさうだ、伊氣のうち呼吸のうちにいのちがある。鳥も蛙もいきして居れば、たんぽゝも蓮花草もいきして居る。春になると芽生え、秋になると枯れると云ふのも、實は大地そのものが、いきして居る證據である、地は土也とかく、土はツチであり、チ、である、土は父に通ずる、これ地上の生命の基である。

◇生命の本尊

もしや茲に大變においしい牡丹餅が、貴下の前に現はるゝとしたら、誰人もその親切な上手な牡丹餅の作り手を想像するやうに、此の天地が大生命であることを承知した今、その大生命の根本を、探索しなければ止まぬ氣分になる。すでに大地が生命であれば、その生命には屹度親がある筈だ。生命の親、即ち大生命の根本なる御本尊が、取りも直さず天地の主なる神である。此邊の消息を豫言者イザヤはよくも我等に告げて居る。

「誰か掌心をもて諸々の水をはかり、指をのばして天をはかり、また地の塵を舛にもり、天坪をもて、諸々の山をはかりしや……なんぢ眼をあげて高きを見よ、たれか此等のものを創造せしやを思へ（舊約イザヤ書四十章）

三千年前の豫言者イザヤの方が、當代の學問の薀奥を極めた、大學校の大博士さんより、よつぽど賢い。

◇萬物同根

天界より始めて下界に降られた伊弉那岐命と伊弉那美命は、遂に人間をまで生み給ふ前に、大八洲を生まれたと云ひ傳へられて來た。（古事記なる古典は太の安麻呂が詔命を以て神代よりの云ひ傳へを、元明天皇の和銅五年に文字に移して編輯した次第である）此の記事は、寔に意義深長である。即ち大地も人間も、素々同種同根であるとの事實を表現して居るのである。この意味にて、人間始め一切の生類は無論のこと、山川草木一切は、神の所產である。世界の何處の神話を繙いて見たとて、人間が神の力なしに、忽然と顯れて來たと記されて居るものは一つもないであらう、果然人間は神の子である。

聖書の創世記では、神樣が土から人間を造り給うたと書いてある。（創生記第二章七節）科學者たちは云ふかも知れぬ、否々、人間は猿から進化して來たものであつて、決して土から忽然と造られたものではないと。このダウヰン的の反抗は、事實であらう、さらば猿は何處から來たか、かく詮議立てをして行けば、アミーバにまで乾度行く。まさかアミーバだつて、天から降つて來たものであるまいから、乾度大地から生れたものに違ひない、否々大地の根本は、實は生命そのものである。して見るときに、神が土を以て人間を作り給うたと云つても、必しも事實相違と云ひ兼ねるのみならず、そこに深遠なる萬物同根の主張が祕められて居るのである。

◇日本人には無神論なし

大八洲を生まれた、伊弉那岐・伊弉那美の兩尊は、最後に天照大神を生み給うた、而して天照大神が、我が日本皇國の、御先祖であると承知するからには、我が日本こそは、神の國であり、天皇はその御直系であらせらるゝの自覺を深うするのである。日本は神國であり、我等は神の子であり孫である。他の國の人なら、或は無神論を唱へやうが、日本人には、すでに無神論と云ふものは有り得ないのである。無神論は無人論になつてしまひ、勢ひ自己の人格否定にまで及んでしまふ。

神道に基督を接げ

神道に基督を接げ！神道に基督を接げよ！

こんなことを云ふたら、或る神道家は怒るかもしれぬ、これこそ我が國の傳統的の神道を亂すものであると云つて。又或る基督者は憤るかもしれぬ、これこそ基督の道の純眞を濁すものであると云つて。更に或る他の人は、その無謀を笑ふかもしれぬ、宗教の事は、植木ではあるまいし、そんなに勝手に接木が出來るものでないと。

斯の如き一々の言説は、みな時代と宗教とに對する認識不足より起る短見である。宜なり使徒パウロは、二千年の昔にその邊の原理を觀破して曰く「若しオリブの幾許の枝、切り落されて、野のオリブなる汝、そのうちに接がれ、共にその樹の液汁ある根に與らば、かの枝に對ひて誇るな、たとひ誇るとも汝は根を支へず、根は反つて汝を支ふるなり」（ロマ書十一章）由て知る今日の基督教なるものも、所謂純眞の姿ではなくして、すでに猶太教に接がれて居るものなることを。のみならず、希臘主義にも羅馬主義にも、つゞいては獨逸主義にも米國主義にも、接ぎ足されて今日に至つて居るのである。

私は茲に云ふ、神道こそは、天が下、他に類例のなき宗教の巨根であると。而して天地一貫の神への信從を以て生命としたまへる基督こそ、よくも此巨根の上に、生々繁茂すべき性質のものである。

唯と汎　わかれ〳〵のくやしさよ　唯汎合致の時ぞ　またるゝ　（昭和八年五月）

電氣と人生

◇田中博士と唯電論

世を擧げて滔々と唯物主義に走りつゝある時、突如として田中博士の唯電史觀なるものが現はれた。唯電史觀は云ふまでもなく、マルクスの唯物史觀に對する名稱であつて、萬有の根基は究極のところ電子の作用に基づくと見るものである。

而して電氣は物質ではない。無論わが商法では商品と見做しつゝあるとは云ふものゝ、之は便宜上の假定であつて、科學的には一種の實在である。而も此の實在は、一定の法則を以て運動しつゝあるのであるが、相對立する陰陽電氣の運動法則こそ唯電論の根據となつてゐる。

博士は電氣工業界の權威で、震災當時まで芝浦製作所に勤務せられ、その後飄然として思想界に入つた方である。(東邦電力・親愛會)

上

◇日本宗教大會

去年の六月四日に日本宗教大會と云ふ前古未曾有の大會が、明治神宮外苑のほとりの日本青年館で開かれた。坊さん達と神主さん、さては新米の基督教の牧師さんと云つた樣な人たちが千三百人も集つて毎日毎日相談をすゝめて行つたのである。何も特別に政府から、御指圖があつたわけでもなく、民間の有志の發起でそんな大げさな宗教大會が開かれたと云ふ事は、日本あつて初めての事でありませう。平常生佛樣の慈悲を說き神の愛を說く宗教家の事であるから至つて仲が良ささうなものであるが、實際はそれほどでもなく、同じ佛教同志の間でも、門徒と法華などは

至つて仲が悪い。嫁にもやらなければ婿にも取らないのは勿論のこと、商取引もしなければ口さへきくまいとする所さへある。まして や從來の宗教と新來の基督教とは仲の悪いことは言ふまでもない。つい此の間まで喧嘩ばかりして居つた。然るに今回に限つては、各宗教の先達たちが喜んで一堂に集つて來たのはそもそも何故であらう。

◇物質主義の弊害

私は此の宗教大會に初めから終りまで出席致して居りまして、其の形勢を承知したのでありますが、或ひは文部大臣の演說、或は總理大臣の祝辭、引きつゞいて種々雜多の議題、一々の討論が今日の物質主義の弊害にふれてゐないのはない事を發見したのである。今日の世間が如何にも物質的にのみ走つて、ほとんど精神的の事を忘れてしまつてゐる。これが今日世間が荒れすさんで行く原因であるからには、

如何にかして今日の物質主義を洋々たる精神主義にまで引きなほさなければならぬと云ふのが、一堂の人々の主張でもあつたし、文部大臣の希望でもあつた。物質主義より唯物論、さてはマルクスの唯物史觀、マルクス、エンゲルスの共產黨宣言と言つた樣なものに喰つてかゝつて、一切の物質主義を平げて神代もろ共の精神世界を建設しやうと云ふのが、滿堂の會衆の共通の目的である如く見えた。

◇思　想　國　難

此處に一匹の狼があらはれて來た。この狼のものすごい叫びをきいて、羊の群である宗教の人達が期せずして集つて來た。願はくばあの吠へまはる狼をトッチメくれんとの希望が、犬猿もたゞならざる宗教界の人々を、今回に限つて千三百人も一堂に集めて來た理由である。如何にすれば今日のこの荒れ狂う物質から救はれて、かの赤い狼を追拂つて、日本の思想界を安泰にすることが出來るであらうか。これ

が今日の大問題であります。所謂思想國難の時であります。さらば如何なる思想の書物が、今日の若い人々の間に讀まれてゐるのでありませうか。南無妙法蓮華經の本尊なる法華經でありませうか、さては南無阿彌陀佛のよつて以つて立つ三部經でありませうか、いゝえさうではありません、古事記ですか日本書紀ですか、いゝえ或は基督教のバイブルですか、いゝえ、さうでもありません。如何なる古來の經典にも増して廣く讀まれて居るのは、マルクス主義の思想であります。物質萬能論の上に立つてゐるマルクス思想が、今は時を得顔に跋扈して居るのである。而して何んとかしてこの物質主義を神代もろ共の精神主義に、立てなほさんとするのが一同の目的ではあるが、さらばと云つて今日は何人も、物質文化を度外視することは出來ない。あの白堊の御殿の如き青年館も、近代文化の粹なるセメントと云ふ代物がなくては到底生れて來ない。否々我等は飯を食ひ水を飲み、日々立派な物質生活をつゞけて居るのであつて、よしや山に入り、霞を吸ふて生きて居る仙人さへも、決

して物質生活を離れることはできぬ。如何なる仙人だつて、空氣一服吸はなくては到底生きて行けぬのである。昔は空氣と云つたからには、空の氣であると考へたかも知れぬ。されども今日となつては空氣こそは、酸素と云ふ高貴なお團子と、窒素と云ふ大事の餡轉を捏ね合した、大した牡丹餅であることは、三尺の童子がチャンと心得て居る世の中である。如何に物質主義を目の敵にしても、到底吾等は物質生活を離るゝことができないのである。マルクス主義は、よくも此の所をつけねらつて、自己の主張は此の誤るべからざる物質主義の上に立つと主張し、近代の科學の立證した唯物論の上に立ち、唯物史觀を編んだのであつて、即ち人間界の經濟のこと、政治の事、一切の唯物史の史の字を唯物的に觀察せんとするのが唯物史觀の出發點である。此の故に彼等の研究は、社會科學の研究であつて、社會の變遷を科學的に決めつけんとするのである。これがマルクス思想が近代の若い人々に、強く訴へる根本原理である。

◇科學と宗教

然るに此のマルクス主義を擊退せんとする宗教大會が、ちつとも物質主義の何であるかと云ふ事にはふれないのである。少しも物質世界の根本にふれないで、恰も犬の遠聲の如く遠方から吠えてゐるのである。この宗教大會の牛耳を取る一人の宗教學の大家は言はれた。「段々世間も開けて來て水銀から金が出るなんと云ふ事が云はれて來た。つい先達、而も水銀から出た金を、長岡博士の研究室で、顯微鏡でのぞかしてもらつて來たが中々科學は六ヶ敷しくつて吾々宗教學者にはわからない況してや一般の諸君に於てをや」と云つた樣にけりをつけて、科學の問題にはふれないで、思想の安定の方面に進んで行つてしまつた。私は實はをかしいと思つた。マルクス思想が、科學科學と云つて科學を盾に取つて、たけり狂うて居るのに、よくもこれを防がんとする宗教大會の先達が、近代科學をそつちのけにしてしまつて

單に思想を思想問題として片附けんとするのは實以つて聞えぬ話である。私は江戸の敵を長崎で取るわけでもないが、科學文化の急先鋒を行く電氣屋である諸君に、ちと聞いてもらひ度い話がある。

◇機械文化より電氣文化へ

御承知の如く日本は明治御維新以來一足飛びに西洋文化を取り入れたのであるが明治の初代に入つて來た西洋文化は、所謂十九世紀の機械文化であります。汽車と汽船、瓦斯燈と郵便と云つた樣な物は、皆これは十九世紀の機械文化の賜物であります。然るにこゝに、二十世紀となつて、更に新しい文化が發展したのでありまして、瓦斯燈よりも電氣燈の方が遙かに便利である。汽車よりも電車電氣機關車の方が遙に經濟である。わざ〳〵煙突までをおしたてゝ、市中を横行する機關車よりも山中の水力電氣によつて運轉する電氣機關車の方が煙もなく煤もなくして、遙かに

愉快であるのは云ふまでもない。郵便よりも電信電話の方が早いし、無線電信無線電話さてはラヂオの時代にまで進化した今日將さに電氣文化萬能の時代と云つてもよからう。二十世紀に入つて電氣文化は將さに機械文化を乘り超えて洋々として進んで行つた。

◇唯物主義とは何ぞや

さても此處に不思議なる事は十九世紀の思想問題がそつくりそのまゝ十九世紀の機械文化と同樣であるのであります。機械が發達した樣に、人間世界の事を機械仕掛に考へだした。一體十九世紀に一切の事を機械的に物質的に考へ樣とする思想は何處から生れて來たのでありませうか。これは三百年來西洋で天地宇宙の本質を眞劍に探べ出して、つひに天地宇宙の本質は幾十といはれる元素から出來上つてゐることが明白になつて來た。この元素たるや、不生不滅の天地宇宙間の基礎であると

云ふのが、十九世紀の初めのダルトンの物質不滅論であります。これが今日の科學思想の根本をなす定說であつて、この主張の上に實は十九世紀の科學文化と云ふものは立てられたのであります。そこで彼等の發明した顯微鏡をもつて如何に人體を解剖して探究して見た所が、其所に靈魂なるものは發見することは出來ないし、又三十三吋の大砲にもまして、巨大なる望遠鏡をもつて天界を隅から隅までのぞいて見ても、其處に神の姿は發見することができない。唯月と云ひ太陽と云ひ天の川かけての一々の星と云ひ、皆物質以外の何物でもない。所詮は此の世界は無神無靈魂の唯物論で說明することが出來ると云ふのが、十九世紀の科學であつた。而して此の物質本位の科學を應用して、機械を造つたり藥品を造つたり橋をかけたり鐵道を敷いたりして、うんと機械文化は發展したのであつて、今日は御同樣に、著しくその文化の恩惠に浴してゐるのであるが、さてこの物質萬能の考へを人間社會に應用されたらたまらない。人間社會の出來事も、神もなければ何等の目的のない物質的

の動きと見るのであるから。當然其處に唯物史觀も生れて來るのである。殊に機械文化の結果として著しく工業的生産力を高め、此處に資本家と勞働者との對立を見るに至り、多くの失業者の群の續出を見るに至り、其處に著しき社會的の缺陷を見るにつけてマルクス主義はこれにつけこんで、唯物史觀の理論を徹底せしめんとするのである。

中

◇眞空管の研究

十九世紀の終りに際し、眞空管の研究と云ふことに沒頭した學者があつた。眞空管と云へば、近頃の電燈の電球と同じ樣な性質のものであるが、電球には中に針金が入つてゐるが、若しその針金を切つてしまへば、電氣は通らぬのである。然るに此處に第一圖の如き眞空管があつて、右が陰極で左を陽極として、これに強い電氣を送ると、眞空管の中でボンヤリ光るものが見えてまゐります。これに外から磁石をあてがつて見ると、中のものが作用されて動く。強い電氣をあてがつて見ても、中のものが動き出すのである。其處で第二圖の如く、この眞空管の中へレールを引

つばつて小さい風車を安置して、この眞空管を一方から電氣をかけて見ると、管内の車が陰極の方から陽極の方へおされて行きます、そして陽極の方は此の車を陰極の方へおしやる力はありません兎角人間社會では男の方が頑張つて、陽性が横暴を極めて居りますが、電氣世界では全く反對でありまして陰電氣の方が返つて活潑である樣に見えます

第一圖

磁石作用
電氣作用

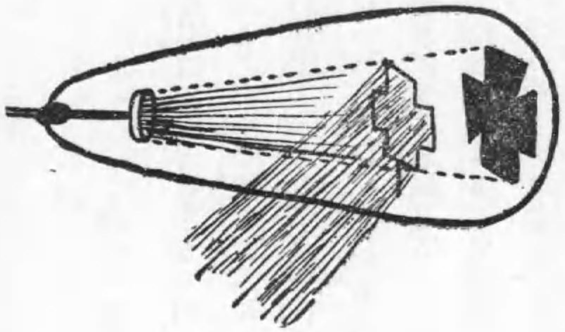
第二圖

動力作用

◇エツキス線の出現

つゞいて同じ眞空管の中に、十字形のものを立てましてこれを陽極に結び、左側を陰極に結びますと、右側に立派な十

第三圖



光透線射作用
作用

字形の影がうつります。かくして初めて、陰極から一種の線が出て居ることがわかりました。而もこの十字形の近所に墓口を近づけた所が、その墓口の中に金貨だか銅貨だかゞうよ〳〵して居ることがわかつて來ました。一體、墓口の口もあけずに、其の中に入つてゐるお金が透きとほつて見えるなんて云ふことは、實に不可思議千萬の出來事であつて、世界の學者の誰もこれを說明することができません。其處でX線と云ふ名前がつけられたのである。X線とは勿論不可思議千萬の線と云ふわけである。斯くしてこの眞空管の中には甚だ以つて不可思議なる現象があることが知られ、英國のク

ルックス教授を初め、多くの人々が、眞劍なる研究をつゞけたのである。

◇三體以外の或物

今日まで世界にあるものを、大まかにわけると固體と液體と氣體の三體になると云ふことが小學校の讀本にもかいてある。斯の固體液體氣體の三體以外何物もあるべからずと云ふのが、今日までの學問の本則であつたが、此處に眞空管の中で動いてゐるある者は、實に不可思議であつて電氣にも感ずれば、磁石にも作用し、車も動かせば又不思議なるX光線的の透視の作用までする。其處で此の眞空管の中に動いてゐるものは果して何物であるかゞ大問題となつた。これは固體の粉末であらうか、否々そうではない。それなら液體の沫であらうか、そうとも思はれない。さらば一種の氣體であらうか、氣體にしては餘りに奇態である、固体でもなく、液体でもなく、氣体でもないあるものが動いてゐることがわかつた。

これは將に十九世紀の物体三体説に對する大いなる抗議であつて、三体以外の何物かゞ此の天地間に存在することがわかつて來て、これを第四体のあるものと名づけた。そしてその微粒子の實質は水素の元素の實質にくらべて遙かに小さなものであつて、水素元素の千八百分の一と云ふ極めて小さな實質をもつて居ることがわかつて來た。十九世紀には八十有餘の元素が、皆別々の物体の根本であると考へて來てこの元素以外の更に細いものゝ存在を許さなかつたのであるが、此處に水素元素の千八百分の一と云ふ、奇妙なるあるものが存在することが明瞭となつて來た。

◇ラジウムの發見

科學世界の大關は云ふまでもなく、物理學と化學である。そして一方物理學が眞空管の中で物質の根本を研究してゐる間に、一方化學者も同樣の研究を初めた。未だ何人も、覺醒的の偉功を奏さぬ間に、キユーリー教授夫妻に依つてラジウムは發

見された。學界に於ける功一級金鵄勳章は云ふまでもなくノーベル賞牌である。

夫人の身をもつて科學者として、此のノーベル賞牌を受けたのはキューリー夫人丈である。以て大した學者であることを知ることができる。ノーベル賞牌を二度まで受けたる學者はない筈だ。然るに此のキューリー夫人は二度までノーベル賞牌を頂戴してゐる事を知つても、其の功績の偉大であることを知ることができる。云ふまでもなくラジウムはキューリー夫人の發見であつて、ピッチ、ブレンドと云ふ鑛石を何百貫も山からもつて來てこれを燒いたり、粉にしたり團子にしたりして、種々樣々に分析したり、電氣で分離したりして、つひに、目藥にでもし度き、小量のラジウムを發見したのである。

◇ラジウムの廢滅

去年私は朝鮮と滿洲の方を、めぐつてまゐりましたが、あの大連に大連病院と云ふ大きな病院があります。これは日本一の大きな病院、否々東洋一だときかされましたが、其處のラジウム療養室を見せて戴きました。其處に數多くのラジウムを發見しましたが其の一番大きいものを私の手のひらの上にのせて見ると、針よりは若干太い、其の長さは將に針の半分、何んだか手がボカ〳〵暖い樣に感じます。暗い所へ持つて行けばラジウム獨特の光を放つのであります。これは一体如何ほど位しますかと主任の先生に伺ひましたら、それは將に一萬圓也と云はれるのであります私は一萬圓と云ふ尊い代物を生れて初めて持ちました。一生かゝつて汗水たらして働いた所で、一萬圓稼ぐ事は中々容易ではない。然るにこのラジウムの奴めが、こんな細つこい姿をして、一萬圓だと云ふのであるから、あきれはてゝ、ものが云へ

ない。萬物の靈長一個のラジウムの前に顏色なしと云ふ有樣である。

ラジウムと云ふ元素は、そんなに高價な金屬でありますから、何時までも何時までも、永劫にラジウムであるべき筈であります。恰も金でも銀でも、凡そ元素と云ふ元素は永遠不滅でありますから、金にも銀にもまして高價なるラジウムの事であります。永遠不滅であると思はれたのは勿論であります。然るに此處に、驚くべき出來事は、このラジウムが千年たつと、その半分は正しく消えてなくなると云ふことが發見されたのである。古來一切の元素は不生不滅だと云はれ、化合するとか、混合するとかすれば、其の姿こそ變れ、元素自体は永遠不滅だと云はれたのである。然るに此處にラジウムは永遠不滅でないと云ふことがはつきり分つて來た。くわしく云へば千八百五十年たつとその半分は消えてなくなると云ふ事がわかつて來た。さらばラジウムは消えてなくなつてどうする。ラジウムはなくなつて、エマナチオンと云ふものが生れて來る。溫泉へ行くと、ラジウムを多く含んでゐると宣

傳されて、ラジウム煎餅だとかラジウム羊羹だとか云ふものを貰ひますが、如何なる溫泉へ行つてもラジウムはお煎餅にしたり羊羹にしたりするほど、そんなにふんだんにあるものではありません。ラジウム溫泉なるものは實はこのエマナチオンが溫泉と共に噴出して居るのであつて、このエマナチオン瓦斯の御利益で、お爺さんの疝氣もなほればお婆さんの寸白もなほると云つたやうなわけであらうが、兎にも角にも、エマナチオンは、空中の酸素同樣の瓦斯体であるからには、これも永遠不滅であるべき筈である。吾等が今日知つてゐる所の酸素は、二千五百年前の神武天皇以來、全く變りがないと思つて來た。さらば酸素と同じ樣な瓦斯体であるエマナチオンも、未來永劫變りがあるまいと思つたのに、豈計らんや、千年はおろか、僅かに三日にして其の姿をかくしてしまふことが分つて來た。第四圖の𝔯なる符號のかたまりがラジュムであつて、Em がエマナチオンである。エマナチオンは明智光秀同樣三日天下であつて、三日にして沒落して、今度は𝔯と云ふ元素に變つて行く。

第四圖

aは三分にしてbと云ふ元素に變つて行く。bとcとは一時間にして、dに變つて行く。dは五十年にしてeに變つて行きeは一週間

にして、fに變つて行く。一匁何十萬圓と云ふ高價なラジウムの事であるから段々に變つて行つても、せめては黄金位にはなつてもらひ度いのであるが、黄金にも白金にもなりかねて、あの眞黑な愚鈍な鉛にまで落ぶれて行くのである。恰も天下一品の美人なる小野小町も、段々に月日も變り卒塔婆小町にまで變化したと云はゝ樣にキューリー夫人の發見された天下一品のラジウムは、此の通り有爲天變の生涯を送ることを示した。

◇ラジウムと電氣

さらば何故にラジウムが、かく根本的に變化して行くのであるか。今ラジウムを第四圖の左の上の方に置いて見ると、それから出る光に電氣をかけると、光が燦然として恰も蘭の如くに分散するのである。これに依つても其の光線が、大いに電氣と關係のあることが知れたのであつて、其の光線の一種の如きは、正しく前述の眞

空管内に動いて居る光線と同じものであつて、これ又水素元素の實質の千八百分の一であることがわかつた。科學界の兩大關は物理學と科學であることは何人も承知して居る所である。今やこの物理學と科學の兩方面より、物質の根本を探究して行つた所がどちらから云つてもこの天地宇宙間に、今日まで知られたる最も輕い元素より更に千八百分の一よりも小さい或るものがかくれて居ることが分つて來た。

◇物　質　と　電　氣

ラジウムはかくも、電氣的の光を出しながら、變遷して行く。然らば此の電氣的の光こそ、物質の根本をなすものではあるまいかと誰にも推測される。果せるかな此の水銀原子の千八百分の一と云はれた微粒子が、元素の根本であつて、この電氣の一個なるのを水素とし、八個なるのを酸素とし、二十九が銅であり、赤穗義士もろ共四十七なるが銀であります。それから金は七十九、水銀が八十、ラジウムこそ

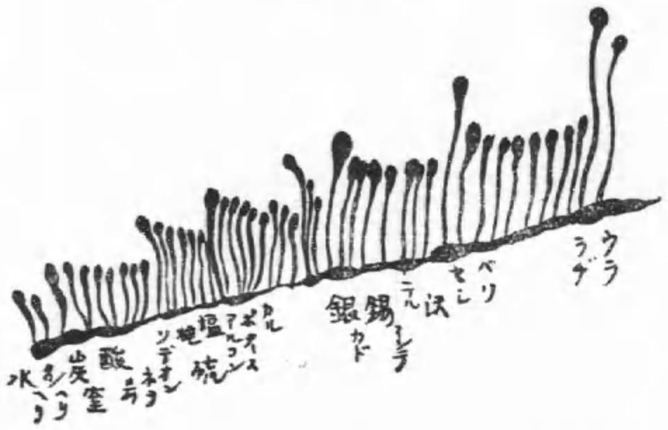
八十八と云ふのであります。一個の元素にして電氣が八十八と云ふのは、あんまり多すぎて自分自身で自然と電氣が逃げ出して、ラジウムは段々變遷して、つひに鉛にまでなつたのである。さればにや、あの水銀から、八十の電氣を有する水銀から電氣を一つ追ひ出すことができたならばさぞかし金ができるであらうと、見當をつけたのが我が長岡博士であつて、其處でこちらの電燈の電壓の六千倍も強い所の、六十萬ボルトと云ふ偉大なる電壓で水銀を突擊したのである。恰も乃木將軍が二百三高地を突擊するの勇をもつて、六十萬ボルトの電力をもつて、水銀を突擊した所が、一個の電氣がビックリ仰天して飛び出して、其處へ金が現はれたと云ふのである。長岡博士のあの實驗を誰がやつても容易に水銀から金を得られるか如何かは別問題として、今日に於ては物質なるものは、一切が電氣から出來上つてゐると云ふことは、全世界の科學者一人としてこれを疑ふものはないのであつて、物質は皆陰電子陽電子と云はれる電氣の根本から出來上つて居ると云ふことは、今や何人もこ

れを否定することはできないのである。さればにや、既に此の世界の根本は所謂物質ではなくして、これは單に陰と陽との電氣の生々活動する場面である。こんな大事なことが、最近の科學の内にかくれてゐるのに、そんなことは科學のことであるから、畑違ひの宗教の人々は、まあ〳〵そんなことにはふれなくても良からうと、そうつと逃げてしまつた宗教界の先達の心がちと分りかねるのである。

◇元素の姿

さらばその九十ばかりの元素の大きさはどの位のものかと云ふと、大凡そ、一寸の萬分の一の、その又萬分の一と云つた様な微細なものであつて、最も輕いものが水素、それからヘリユム、リシウム、だん〳〵重くなつて最後がラジウム、ウラニウムと行列をして居る。第五圖は總ての元素の直徑を示したものだが、この圖では恰も、春の山の蕨狩の如く、元素が行列して居るのであるが、これはその直徑の

第五圖



大体の形を示したものであつて、元素は勿論こんな蕨の如く細長いものでなく大体球狀と見られて居る。而もこの元素なる塊が、決して打ちくだくことができない萬物の基礎だと思つたのは、十九世紀の科學であつて今日に於ては、この元素なるものは中心に陽電氣がひそみ、そのまはりを幾つかの陰電氣がぐる〳〵まはつてゐると見られて居る。恰も太陽のまはりを幾つかの星々がまはる如く、中央の陽電子のまはりを、數個の陰電子がぐるぐる廻つてゐるのである。一個の游星がぐるぐる廻つてゐるのが水素であり、八つ廻つてゐ

るのが酸素であることは、先刻のべた通りである。その一々の陰電子なるものはこの微細なる元素の大きさの、更に五分の一と云つた様な小さなものであつて、而もそれが自轉してゐるんだと、その道の學者に依つて唱へられてゐる。而もそれが電氣とも云はれる氣であるのだから所謂物質でないのは明らかである。この陰陽の電氣の活動が、この生々たる天地宇宙の基礎をなしてゐることを告げた二十世紀の科學は、實に偉大なものではないか。

◇科學的世界觀の變革

今日西洋より出發して、東洋をあらしまはつてゐる思想は何んと云つてもマルクスの唯物史觀である。この一匹の狼が大きな口を開いて吠え叫んでゐる。何故に世人がこれに怯えるかと云ふに、それは社會科學であつて、誤るべからざる科學の上に立脚してゐると云はれるからである。唯物史觀と剩餘價値說は人間の眞理そのまま

、であつて、階級闘爭は今日の社會の必然の結果であると云ふ。

さらばマルクス時代の科學なるものが、果して天地の本質を說明し得たであらうか。天地の本義の上に人間社會の人道を立てたならば、これは中々根强い。さらば十九世紀の科學は如何に天地を、說明したのであらうか。十九世紀の科學が物質なるものを、天地の基礎として承知したことは既にくわしくのべた。此の物質以外に他にエネルギーなるものも存在する。電氣であるとか、光であるとか云ふものは、皆エネルギーである。他に又空氣もなき虛空にもエーテルと云ふものが、一ぱいみち〳〵てゐると云はれた。即ちこの天地宇宙は物質とエネルギーとエーテルとの三王割據の姿である。而してこの物質とエネルギーとエーテルとの三つは互ひに如何なる關係があるかは全く不可解であつたのである。して見れば、これは三王分立の戰國時代であつて、何等の統一のつきかねた世界の見方と云はなければならない。

卽ちマルクス時代の科學は、そんな不徹底極まる科學であつたのであるから、そん

な淺薄なる科學の上に立つて、微妙を極めたる人間社會の活動の法則を定めるなんと云ふことは、出來ない相談のことである、神ならぬマルクスが當時のこの中途半端の科學を脱出することができぬのみならず、實の所マルクスはこのお粗末千萬なる科學の忠實なる弟子であつたのである。而るに此處に二十世紀の時代に到達してキューリー夫人だのJ・Jトムソンだの云はれる眞劍なる科學者の、命がけなる研究の結果、此處に全く新しく科學的に天地宇宙を拜することができた。

所謂物質なるものは存在しないのであつて、これは單に陰陽の電氣とも云はれるエネルギーの活動の場面である。さらばエーテルなるものは如何に。これも既に否定されてしまつた。天の川かけての空間、或るひは天の川の外なる空間一切の空間は、陰と陽との電氣の活動に依つて現はれる場面であるとアインスタインは結論した。

物質界の窮極なる元素は中央なる陽電子のまはりを陰電子がぐる〳〵まはるこれ

は陰陽互ひに引く電氣力であることは勿論である。さらば太陽のまはりを地球がぐる〳〵まはつて行く、この萬有引力なるものは果して如何なる性質のものであらうか。此の萬有引力も電氣力の一種である所以を、つひ先達つてアインシタインが立證したとて、世界の新聞が喧しい。

此處に於てか二十世紀に進出した科學は物質も認めずエネルギーも認めず單に電氣とも云ひ得べき精氣が洋々として活動する場面であるのを告げた。何んと大した變革ではありませんか。

◇生物と無生物

直ぐ小學校の理科の本をあけて見ると、この地球上の萬物を生物と無生物との二種に區別すると書いてあります。私は小學校の先生から左樣敎へられ、又その如く信じて來たのであります。人間の如きは萬物の靈長で勿論生物の一種であり、水で

あるとか空氣であるとか云ふものは鑛物質であつて、無機物であり無生物であると敎へられて來た。このマルクス時代の十九世紀の科學は果して天地の、ほんとうの姿を敎へたものでありませうか。たとへばこのコップに、一ぱいの水があるとすると、これは無生物だと云つてさげすんだのであります。然るに吾等が若しや日本アルプスの連山にでも登り、其處に一ぱいの飲み行く水もなくして、一日も二日も經過してしまつたとしたら、吾等はすつかり疲れてしまふ。口もこはばつてものもいへず、泣くに泣き度くも涙は出ません、トント干物同樣になつてしまふ。その時に誰かゞ、山の彼方に滾々として流るゝ清水を發見した時、其の時は、誰も彼もが無心にそこに嚙ぢり附き、心行くばかり清水を飲むであらう。そして初めて生き返つたと云ふ氣持に立ちかへるであらう。一體この直觀の上に立ち返る時、誰人か水をば單に無生物だと稱して、これを死に物扱ひにする權利がありますか。若しもそれを飲んで死んでしまへば、水こそ無生物であり、死に水でありますが、その水を飲ん

で若返つて來るのだからたまらない。實は生命の根本が、水にも秘められて居るものと見なくてはなりますまい。これに依つて見てもこれをば無生物扱ひし、天地間の萬物を生物と無生物とに分けた十九世紀の科學の淺はかさが分ります。

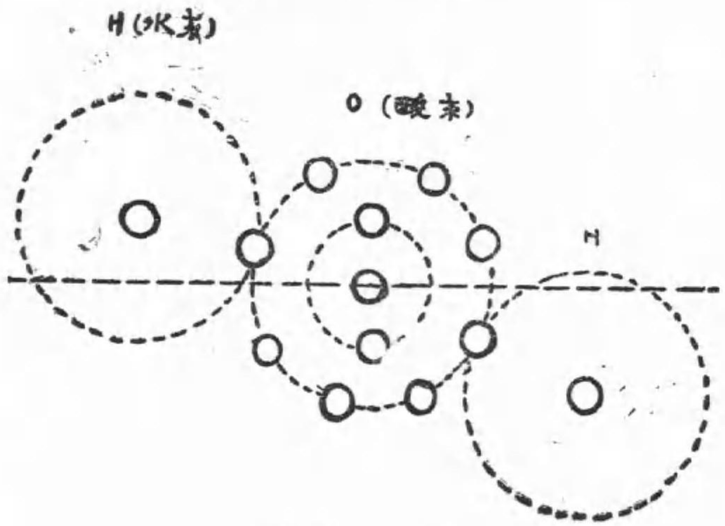
◇水の構造

水は酸素と水素からできて居ると云はれて居ります。其處で中學校の生徒が「先生、何故酸素と水素とを一緒にすると水ができるのですか」と質問すると先生は早速答へるでありませう。「それは化合するのです」「先生、何故化合するのですか」と生徒がほぢくつて聞けば「それは科學の親和力で一緒になるのだ」と答へるでせう。其處で生徒がまだ合點せず「先生、そんな親和力は何處から生れて來ますか」と問ひ詰れば、此兒は判りの惡い生徒だと云つて、恐らくは先生から、お目玉の二つや三つは頂戴することであらう。そんな根本の原理は中學校の先生に分らなかつ

たのみならず、まだ〳〵十九世紀では全世界の學者に分らなかつたのである。然るに最近の科學は、酸素と水素の化合する理は陰陽電氣の調和の理であることを敎へてくれます。

酸素はまん中に陽電子があつて、その外側を八つの陰電子がぐる〳〵廻つて居ります。くわしく云へば陰電子の二つが内側を廻り他の六つが外を巡つて居ります。そしてこの六つが、八つになつて初めて調和ができる樣にできて居ります。例へば天に四つ、地に四つと云つた樣に、四つと四つと云ふ風になるとその組織が安定が取れるのである。然るに酸素の場合には陰電子が六つしかない。所が水素は外側に陰電子が一つ馳け廻つてゐる。其處で其の水素を招いて來て、これを抱容するとまはりの陰電子が七つになる。今一つを抱容すると八つになる。此處に於て水の分子と云ふ極めて安定なる化合物が出來上るのである。即ちこれが第六圖の如くに酸素一個のまはりに二個の水素を擁して、所謂H^{20}なる水の分子が出來るわけであります

第六圖



酸素と水素

即ち陰陽相擁して一軒の家庭生活をして居るのであります。

而も此のコップ一杯の中の水なるものは、單に十九世紀式に水素二つに酸素一つ(H_2O)なんと云ふ分子の式で片附けられるなんと云ふ、そんなお粗末千萬のものではあらずして($H_{20}O$)が幾つも〳〵重なり合つて、如何なる御殿にもまして複雜なる構造をなして居り然も水素の元素が陰電子丈はちやんと酸素へあづけて置いて、陽電子丈が一人で勝手に活動

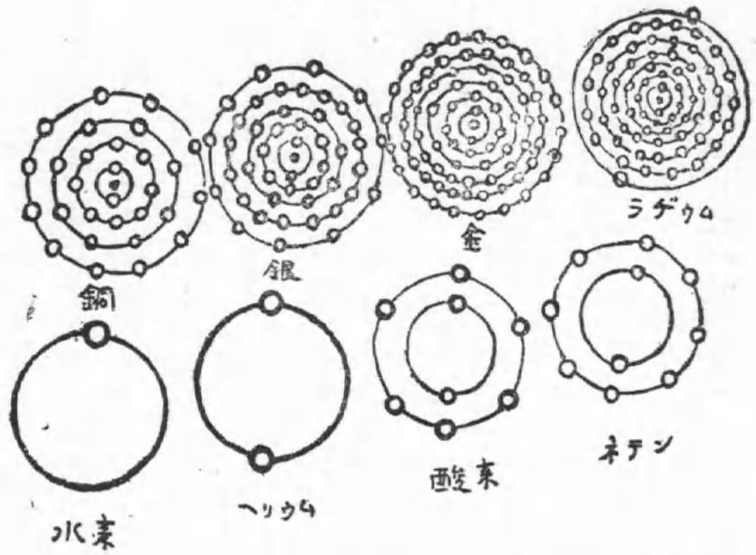
するなんと云ふ便宜と自由とを有して居る。これが即ち所謂水素イオンと云ふものが起つて來るわけであつて、このイオンの活動の程度に依つて水の活動度もはかれ或ひは種々様々な藥や人造肥料などの御利益の程度が測定されることを知つても電子論なるものは、今日となつては空の議論ではなくして液體の活動の度を量る重要なるバロメーター（測定器）になつてゐる事を知る事ができる。かくと承知して誰人か、水を單なる無生物としてあざける事が出來ますか。實は大生命が水や空氣の中に潜んで居つて、これがあらはれて一切の生物世界にまで進化したものと見なくてはなりますまい。

◇萬物の活動

して見る時は、昔塊つた元素だと思つたのは大いなる間違ひであつて一切の元素は生々活動して居る活動物であります。枯死せる不動の靜物では決してありません

今此處に私の懐中時計があります。此の六圓五十錢の國産の懐中時計が、プラチナであるかニッケルであるかと云ふことは、それは諸君の御判斷に任せます。但しはこれを火の側にもつて行つて見ますと、手でさはれぬ位熱くなります。この事を諸君は何とお考へになりますか。これは、金屬の分子がやゝ活動がはげしくなつて、私の皮膚を突くのであります。皮膚を強くつく故に熱く感ずる丈であります。して見れば冷い時も決して分子は靜止して居らぬのであります。金屬の分子は絶えず生々活動して居るのであります。つひ先達つても大阪へまゐりまして住友の製鋼所で一千人の方々と、天地の秘義を御相談して來たのでありますが、製鋼所の研究室には恐らくは日本一だと自慢された五千倍の顯微鏡がありました。そして鐵の表面を此の五千倍の顯微鏡で、覗かして貰ひますと、丸で滿鮮の山々の上を恰も飛行機で飛ぶが如くに、鐵の分子が見えて來ます。所が此の鐵を火の中に突き込んで燒きまして、チューッと水の中へ入れて、今度は其の姿を顯微鏡で拜見しますと、其の模

第七圖



様がからりと變り結晶が至つて緻密になり、恰も鴨綠江に材木がうよ〳〵と浮いて居る樣に見えて來ます。其の邊の呼吸は、昔は正宗や備前の長船に任せて置いて、何處の鐵がよろしいとか彼所の山の炭がよろしいとか云つて、單に天才の經驗に任せて置いたのでありますが、只今では、本多博士等の驚くべき科學の進歩に依つて、鐵の分子の組織たるや、實に靈妙不可思議である所以を、知る事が出來る樣になりました。

例へば、吾等の一滴の血液を點檢して見ましても、この一個の鐵の元素のまはりに驚くべき元素の數々が附着して、有機化合物の基礎を築いてゐます、斯くの如く無機化合物は有機化合物に進化し、つゞいては千載一遇の機會に、否々、幾億千歳只一遇の機會に、バクテリヤとか、アミーバーに類する單細胞生物が出現して、其れが段々進化發展して、松ともなり、竹ともなり、猫ともなり、犬ともなり、何時しか万物の靈長たる人間が、此の世界に出現する事が出來たのである。生命の根本原理は、これを地球以外に求めるのでは無くして、寧ろ天地の基礎をなす所の、陰陽一元の電氣の力より出發して、一切の世界は進展向上するものでありまして、曾て二宮尊徳先生が

音もなく香もなく常に天地は書かざる經をくりかへしつゝ

と歌はれたが、まことに天地は文字を以つて書かざる大經文であつて、最近の開けたる科學は如實に、その神秘の扉を開いて吾等に見せて呉れます

下

◇物質思想より電氣的へ

今日吾等の社會の現狀を見つめる時に、其處に改造を要するものは多く存在して居ります。人間社會と雖も決して停滯する事を許しません。されども其の改造の原理が、マルクスの唯物史觀と階級闘爭説にあると云ふなら、それには大いに異議があります。今日の社會組織の間に、例へば會社組織の如きは千人も万人もの人が、一心同體になつて、勵んでこそ、若干の利益も擧るのであるが、若しそれ資本家も勞働者も、皆マルクスの弟子になつて喧嘩腰に階級闘爭的氣分になつたとしたら如何か。斯くせば、例へ理窟は立つても、儲からなくなる事は請合である。産業は萎

微沈滯してしまふ。此處に於いてか、小作爭議とか、勞働爭議とかサボタージとかストライキとか云ふ現象は社會進化の本義に即したものに非ずして、むしろ協調共榮が社會進化の本則であるべきである。温情主義だと云つて、輕々しくこれを葬り去ることは出來ない。人間社會から温情を取り去つて見るがよい。後に何が殘るかマルクスの議論に、其所に傾聽すべきものを藏して居るとしても、其の出發點に於て既に大いなる誤解をなして居るのである。陰陽差別のあるべき世界を單に平等の一味できめつけんとした所に西洋的の行き違ひが存在して居る。十九世紀の科學は鐵道を敷き、鐵橋を架けると云つた樣な、單なる物質文化の方向に應用しては大した行き違ひもなかつた、而るに其の唯物論を、其の儘人間社會に應用して唯物史觀として現はれて來てはたまらない。これは社會構成の原理を眞個に吾等に告げるものではない。從つて社會進化の本統の原理にふれない。そんな考へに惑はされては迷惑千万である。實は文藝復興以來、三百年間、人間の理智の力の限りをつくして

天地のほんとうの姿を求めんとして、つひに物質こそ、天地の本質である所以を發見して、恰もミイラ取りがミイラになつた如く物質の捉らうる所となつたのが十九世紀の科學である。而るに二十世紀が開けてから僅かに三十年、此處に天地の本質は陰陽一元の電氣の、生々活動する所以を發見して、洋の東西を問はず、三千年來人間の求めてやまなかつた根本原理を、今此處に三十年にして吾等の目前に、明らかにされたのである。まことにありがたい限りであつて、こんな有りがたい世界に一時でも長生をし度いものである。

◇宇宙一貫の大生命

天地宇宙の根本は電氣の力であります。このエネルギーに誘はれて宇宙は進歩してやまない。これは宇宙にひそむ精氣であり精力である。かゝる力に誘はれて、大宇宙は發展して行きます。これは宇宙力であり、實は宇宙生命力であります。然る

にこれを生命と見ずして單なる機械仕掛に見樣とするならば、其の人の考へが如何に不徹底であるかと云はなければなりません。まことに天地宇宙は大生命であります。そうした生命力にさそはれて、万物靈長として吾等も此處に出現することを知りますと、感謝感恩の念を拔きにして、吾等は一日も生活することはできません。吾等が此の天地生命より生れて來た一個の存在であることを承知して、一切の命の親である所の、神をあがめると云ふことが宗教の出發點であります。

さて天地宇宙の根本が既に物質的ではない。これは電氣であると云ふ事實を知りましたなら、吾等は如何に生活して行つたら、よいのでありませうか、此事を電氣の立場から先づ私と一緒に考へて下さい。電氣は陰と陽とであります。天に陽電氣が起るとき必ずや大地に陰電氣がひそんで居ります。一陰一陽の電氣は天地を覆うております。この陰陽の電氣の相結ばれて行く道は何でありませうか。若し人間なる存在が天地の外から、天下つて來たと云はれるなら格別、若しも人間が天地人の

三才の一才であるからには矢張り天地の理法に從はなければなりません。若しも天地の本義をつきつめて見て、これが多摩川の砂利もろ共、ごろ〳〵した物質的のものであり、或ひは陽と陰との電氣のみと云ふならば、階級闘爭と生存競爭が、社會進化の唯一の道であるかも知れぬ。然るに天地の根本は陰と陽とである。一方に百千億兆の陽電氣の存する所、必らずや他方には、全く同數の百千億兆の陰電子が存す一夫一婦が電子の原理である。上下四方陰陽互ひに相引き、陰陽互ひに勵して行くのが電氣の原理である。陰陽互ひに相引き行く姿、何んと云ふ字を以つて、これをあらはすべきであらうか、これは愛と云ふ字を以つてあらはすより外はありません。此の「親愛」の愛の字以外には天地を結ぶ法則は斷じてない。

◇共存共勵の實行

日比谷公園のわきに、小さい工場がありまして、曾つて十年許り前、ストライキ

の流行した時分、その工場も矢張り其のあほりをくつて非常に荒れてしまつて、工場長も追ひ出してしまひ、後に誰れも引き受け手がなかつた。そこで資本家は一人の人に托して、その工場を經營させ様としたのである。其の人は眞つ平御免を蒙むると云つた。とても私如き未熟の者には、お引受けすることができないと再三固辭す。然し是非にと頼まれて到々引き受けることになつた。そこで新任工場長は、一日工場に臨みまして百人の職工諸子の前に立つて「今日まで如何なる方針で、この工場を經營したかは私は知らないが、今回私が皆様と御一緒に仕事をする様になりました以上は、今後は諸君を神の子とし、佛の子として御待遇申しますから」と云つた様な、挨拶をして引きさがつた。今までウント荒れて居つた職工さん達は新任の工場長から、お目玉を頂戴するかと思ひの外、神の子だとか佛の子だとか云ひ出されてまるで狐につままれた様な氣分で、アッケに取られて引き下がつた。

いよ〳〵新任工場長が仕事を指揮する段取りになると、その工場では眞珠とか金

だとか銀だとか云ふものばかりを扱ふのでありまして、それらの貴金屬や、寶石の出し入れには、本人は勿論、皆係りの事務員が幾つもの判を押して、取り締るのであつた。所が今度は神の子に金でも銀でも渡す時に、一々證文を取る必要があるであらうか、狐の嫁入りの提灯行列の樣に判行をべた〳〵押す必要があるであらうかいゝえ、ありません。一切の判行行列はすつかりやめてしまつて、事務員も女店員も皆んな一緒になつて働くと云ふことに方針が一變しました。只間違ひのない樣に帳面にははつきり記載するものゝ證文を取ることはやめてしまひます。そこで、古顔の親爺は「大したことが初まつたものだ、新任工場長は變り者だ、そんな事で人間はつかへるものではない。今に大きな穴があいて、ノッチもサッチも行かなくなる時が來るぞ」と腹の中で言つて居た。

御承知の如く金銀を扱ふ工場では金べりと云つて、金の屑が飛んだり、はねたりして、若干の無駄が出るべき筈である。而るにこの新しい施設以來一年を經過して

一割三分もあつた金べりが、七分になり更に二年三年と進める中に、若はやそれが五分に到達すると世界のレコードを破ると云ふ所にまで到達した。人を疑つてかゝればこそ、疑心暗鬼を生じ、色々の事件が突發する。お互ひに信じてかゝれば、斯くの如き美事の成績をあげるのである。まことに人は神の子であり佛の子であるのである。當時の內務大臣の床次さんも、大勢の役人をつれて、この御木本眞珠工場の、齋藤工場長の新しい施設を見聞されて、その結果を「新しき工場經營法」と題して全國の工場に配布した筈である。

◇唯物史觀より唯電史觀へ

かゝる事を承知するにつけても、單に物質的に生活すると云ふ思想は、これは既に舊弊の思想である。それは十九世紀の巨大なる迷信でありまして、奈良の大佛にも勝る大いなる偶像であります。唯物史觀は人間社會生活の研究の單なる拜殿に過

ぎませんで、その奥にはもつと深いものが安置されて居ります。吾々は所謂物質的に生きずに精神的に生きなければなりません。さらばと云つて山に入り、寺に隠れて、徒らに精神生活にあこがれてはなりません、醒めて見れば物質生活の奥に洋々として精神生活がひそんで居ます。陰陽電氣に動かされて、生々活動する場面であります。此處に於いてか、物質生活を捨てゝ、精神生活に入らんとするにあらず、よくも物質生活を貫いて、精神生活に入り度いのであります。「神は禮なれば神を拜せん者は靈とまことを以つて拜すべきなり」とキリストより承る如く、此の活動の社會に即して、立派な精神生活を送り度いものである。こゝに於てか、唯物史觀の物の字に暇をつげて、洋々としてこれを乘り越えて、唯電史觀に進出すべき時が來た。實に今日の思想界は混渾たる姿を呈してゐる。

十九世紀の唯物論はエレクトロンといふものをまだ知らず、原子が萬物の本源であると考へてゐた。そしてこの幾十の原子の組合つて出來た物の上にマルクスは立

つて居る。ところが、原子なるものが、どん〳〵變化するもので永久不滅の本體ではなく、原子の奥に電子があり、この電子の本體は陰陽の組合せてあると云ふ事が判つた今日原子主義上に立つたマルクスの淺薄であることがわかる。即ち二十世紀の科學は既に唯物論より唯電論に進出したのであるから、マルクスの階級闘爭的唯物史觀より、百尺竿頭更に一歩を進めて、陰陽相和する共調共存共榮の唯電史觀に進出すべきは、當然すぎるほど當然であります。

天地しらす神のめぐみしなかりせば
一日一夜もありえてましや

（昭和四年七月記）終り

共産主義者の轉向

最近の新聞紙は、突如として共産黨の巨頭、佐野某鍋山某の、思想轉向を報じた。更に轉向聲明書を發表すると同時に、特に之等同志の上を憂へて、右要項を更に演繹したものを執筆し、去る十三日、「共同被告同志に告ぐる書」と題して、悔恨痛切を極めた書類を、共同被告百八十名に傳達を乞ふた。

今茲に新聞紙の傳へたる「共同被告同志に告ぐる書」の大要を見るに、彼等が無限の信頼を寄せて來た、共産主義なるものが、その政治組織そのものゝうちに欠陥があるのみならず、その根本原理のうちにも、人間生活に即せざるものあるを發見したとの事だ。且つ又、露西亞の猫眞似をして、今日の日本國體に危害を及ぼさんと企てたことの、根本的に誤謬なる所以を悟り、思想の動搖、その極に達して、極端なる左傾より、全然、主義と方針を異にする右傾にまで搖れて居る。彼等兩人の心境を語つて居る。

共産黨の首領は、今や獄中に悔いた。之は實に感謝すべき近來の大事件である。今十年早く氣が付いて呉れゝば、尚更結構であつた。河上某佐野某等の眞劍なる學者が、若しも十年以前二十年以前に、社會機構の本質性に氣がついて呉れたならば、今日の萬千の青年學徒を、かくも迷はせずに、事濟みしものを。まことに遺憾至極である。

（昭和八年六月）

科學道より出發して

上

◇第一に日本人

先づ何事よりも先に、我等は日本人であります。世界文化の創けてより五千年、茲に東洋文化と西洋文化の兩波が、互に相合して大波をあげ渦を卷きつゝある時代に生れて來たのである。今日は實に經濟問題と云ひ外交問題と云ひ、容易ならぬ難局に棹しつゝあることは、諸兄のよく御存知の通りであります。到るところに行き詰りの歎聲をきくのでありますが、この難局こそ我が日本の上に加へられたる試

煉の坩堝であつて、よくも之を經過してこそ、世界文化を更に今一段高きに引きあげることが出來るのではないかと思ふ。

◇第二に海軍の人

第二に諸兄は海軍の人であります。全世界の文化の尖端を行きつゝあるのが諸君であります。全世界に使して、國家の權威の下に、世界の平和のために計りつゝあるのが諸君であります。私も早い頃から電氣機械の設計と云ふことに携はつて參りましたから、帝國の軍艦とは至つて御懇意でありまして、殊に潜水艦の主要電動機の設計製作には、人知れず憂身をやつしたものであります。かの一千馬力に餘る電動機を小さく而も輕く造らなければならぬのでありますから、電線の絶縁の材料にも、普通の紙や布を用ふることは出來ません、薄い不燃燒のマイカであるとか雁皮紙であるとか云ふものを用ひなくてはなりません。そこでその設計の仕樣書は、よし

や完全でありましても、若しも現場の職工の一人が、一寸した手落から、金屑一つ取り損ねたとしたらどうでせう、目にも見えぬ金屑一つの祟りで、一旦有事の日、國家の興亡に關するの日、この金屑一つの祟りで、堂々たる潜水艦も、全くその機能を失ふに至るのであります。私はこの意味に於て、大事業大工業の興るためには、上下一致の眞の和合がなくては到底駄目だと思ひ、窃かに今日の工場界の不平不滿に充ち滿ちたる空氣を憂ひて居るものであります。

◇科學の人

第一に日本人であり第二に海軍の人である諸君は、第三に科學の人であります。諸君の受けて來た教育が科學本位であることは勿論、この堂々たる海軍省の一角が、科學文化の賜物であるばかりでなく、五十萬噸の大小の軍艦は、これ皆一切、科學文化の産物でないものはない。茲に於て我等の眼前に提供された大問題は、此今日

の科學文化は、果して我等の靈性迄を、救ひ上げてくれるものなりや否やの事實であります。西紀千八百三十年英國のリバープルとマンチエスターの間に始めて鐵道が敷かれてから正に百年、全世界は蜘蛛の巣の如くに鐵道と汽船は通ずるに至つた。

◇物質不滅論

此今日の科學文化の濫觴は、人間が徒に天地間の萬物を怖れずして、よく之を利用するの道を覺へたことに始まる。而してこの人間の出發した利用厚生の道の武器は何であつたであらうか。これは正しくダルトルの物質不滅論であつた。ダルトンによつて、一々の物質の不生不滅なる理が明にせられ、而して之が應用が一切の科學文化であつた。ニュートンに出發した近代科學は、茲にダルトンに至つて物質不滅論として、確固不動の基礎を築いた。これが正に十九世紀の初頭である。このダルトンの物質不滅論を基調として、燦然たる物質文化の時代が出現した。かの十

八世紀の末葉に於けるジエームス・ワットの蒸氣機關の發明や、アークライトの紡績機械の發明等を動機として、目醒ましく發達し來りたる機械工業は、勢ひ貧富の著しき懸隔を來し、ひいては勞働者の虐使となり、茲に十九世紀の半ばに於て、マルクスをして彼の資本論を編ましむるに至つた。マルクスの資本論が、英國に於ける勞働者虐待の事實を見て、之を救はんがために書かれたものであることは事實であるが、その資本論の本據とするところは、正に唯物史觀であり、十九世紀の初頭に基礎づけられし科學的唯物論の上に立つて居ることは確である。

◇唯物史觀の吟味

即ち天地間一切の現象が唯物的に説明出來るものであるなら、その間に介在する人間の行動も、生產分配等の經濟の事實を基礎として考究出來べき筈ではないかと云ふ議論である、即ち人間行動の歷史の史實を唯物的に觀察せんとするのである。今

やこの唯物史觀の論法を以て、單に經濟や歴史を論ずるに止らず、人間の一切の精神行動までも、此見地より觀察し、從來の宗教的行爲は勿論、人間の道德迄を無視せんとするものも出現するに至つた。而して彼等のイデオロギー（觀念論）は誤るべからざる哲學的論陣の上に立ち、而もこれ近代の科學の上に基礎を置くと稱し、「我等の研究は、社會科學の研究であり我等の社會主義は、科學的社會主義だ」と主張する。茲に於てか我等は、この唯物史觀の、依て以て立つ唯物論が果して科學的に眞理なりや否やを檢討せんとする。

◇科學主義を貫いて

云ふ迄もなく我等の今日の教育は、科學主義である。而して此科學主義の教育を受けて、機械を造るを得べく又橋を架けるを得べし、されども人間の行くべき道を求めるには、そこに何等かの欠陷の存在することを否定することが出來ない。燦然

たる電光のイルミネーションは、よく十里の外を照すを得べし。されど人の心の内なる光は、日々に暗くなり行く事實を如何にせん。是に於てか今日の科學主義の教育に、何物か外より所謂精神教育を施して之を補はんとするのが、今日の我が國の教育界の大勢であるが、それも中々困難であることは、文部省に開かれた全國校長會議が、よくもその事情を物語つて居る。そこで今茲では、今日の科學主義そのものを探究して見たいと思ふ。

◇宗教々育

學生の宗教々育を如何にすべきかと云ふことは、毎年々々學校長會議に、文部省より提出される問題であつて、其事それ自身が、この解決の如何に容易ならぬものであるかを物語つて居る。純粹の科學教育は、人の子を唯物的に導く危險性をもつ、否々當然唯物主義に導くべき運命をもつ、茲に於てか、手をかへ品をかへて、色々

の精神主義を加味して此教育上の欠陥を補はんとするのが、歴代の文部大臣の、主要の問題である。その精神主義が、東洋的のものであるか、將又西洋的のものであるか、さては又日本獨特のものであるかは別として、何ものか精神主義を加味して、所謂唯物的の科學主義を制御緩和せんとする。東洋獨特の美術講座を起して、思想の赤化を防がんとする如きは、あまりに見えすいた窮策と云はねばならぬ。

◇二頭を逐ふもの

かくも科學主義と、或る種の精神主義と二頭を携へて、人の子を導かんとするのであるが、此時に方り一切の精神主義を認めざるマルクス主義は、一途に科學的に徹底せんとするのである。是が非でも一本調子に、行くところまで行かんとするのである、茲に正しくマルクス主義の強味がある。二兎を逐ふものは一兎を得ずとの諺もあるが、マルクス主義は單に物質的の一頭をのみ逐はんとして居る、そこに

力もあれば、熱も出るのである。

◇大事の相談

茲に於てか我等の前に、大問題が提供されるのである。今となつては、物質界を度外視して、單に精神界にのみ生きることは出來ない。さらばと云つて物質界に精神界を加味すると云ふのでは、ホンの付け燒刃であつて、忽ちにして離れてしまつて、さつぱり切れ味を増さない。さらば物質界にのみ止れば、勢ひ唯物史觀に墮せざるを得ない。されども茲に百尺竿頭更に百歩を進めて、物質界の本姿を檢討するときに、そこに唯物史觀を乘り越えて更に本質的の姿に導かるゝの道がないものであらうか、今日は此事を篤と研めて見たい。

◇機械文化より電氣文化へ

今日の文化なるものを、よく考へて見ますれば、これは機械的の文化であります、アークライトが紡績機械を發明して以來、今日に於ては綿織物の數量は、年産額一千倍以上にも達して居るとの事である。この一事を以てしても機械文化なるものが、人間生活を豊かにして居ることが判る。汽車と汽船と瓦斯燈と郵便、これ皆機械文化の賜でないものはない。然るに茲に機械文化より後から發達して來て、悠々と此機械文化を乘り越えて行く一文化が出現した。これはかの製本屋の小僧なる、ミカエル・ファラデーから出發した電氣文化である。ファラデーが嘗て、磁石の近邊で針金を動かすときはこの針金に電氣の起るの理を發見し、時の大宰相グラッドストーンの前で、滔々と其原理を説明せんとするや、流石慧眼のグラッドストーンも、學術講演には少々迷惑の體であつた。そこでファラデーは大宰相に念を押して曰ふた。閣下よ今に此私の一實驗が、閣下の經濟政策を左右するときが來ますぞと。果せるかなファラデーの電磁感應の原理は、單に英國の經濟に止らず、極東日本帝國幾

十億の資本を擁する電氣事業まで引き起すに至つた。

◇電氣の世の中

磁石の側で針金を動かせば電氣が起ると云ふ一つの實驗、これは誠に些細な實驗には違ひないが、これが實は發電機の原理であり、又つゞいては電動機の原理であつて、これあつて電氣文化と云ふものは著しく發達した。嘗てはフランクリンの凧に捕へられて、その正體を現はした電氣、ブンセンによつて化學作用より安價に起し得るに至つた電氣は、モールスによつて電信機となり、ベルによつて電話機となり、エヂソンによつて白熱電燈となり、十九世紀末より廿世紀の時代を、全く電氣文化の時代に化してしまつた。一本の煙突より獰猛なる黒煙を吐いて市中を横行した蒸汽機關車よりも、電車と電氣機關車の方が遙に文化的であり、經濟的であることは勿論のこと、大洋をゆく大汽船や軍艦の間にまで、電氣船が出現したことは、

諸君の御存知の通りである。

◇十九世紀の機械的世界觀

かくも十九世紀までに全盛を極めし機械文化が、二十世紀に於て、更に進歩した電氣文化に凌駕されてしまつた如く、十九世紀迄の人間の考へ方であつた機械的の世界觀は、二十世紀に於て、電氣的の世界觀に置き換へられんとするに至つた。

文藝復興時代の後をうけて、ニュートンによつて、天體の運行でさへも、一種の機械仕掛に過ぎざるの理が發見せられ、天地間一切の現象を機械仕掛に說明せんとする思想が人間の間に流行した。人間自體でさへ巧妙を極めたる一種の機械ではあるまいかと考へらるゝに至つた。我等人類の如きも犬猫同樣の下等のものから、漸々と機械仕掛で進化したものであるとの理も、ダウ井ンによつて闡明せられ、人間萬事一切の事變を、一種のカラクリとして考察せんとする思想の横行しつゝありし時

代、十九世紀もその幕を閉ぢんとする二十年前英國の理學者クルックスによつて、茲に新しき研究の結果が提出された。

下

◇十九世紀の半端の科學

マルクスの唯物史觀は、歷史の動きを單に物質的に說明せんとする、而してその基礎は科學的の唯物論の上に立つ。この故に彼等の主張する社會主義は、既に冥想的のユートピヤの社會主義に非ずして、科學の基礎の上に立つ社會主義だと主張する。その目的は社會科學の研究であると云ふ。マルクスの唯物史觀は、科學的の見

地の上に立ち、哲學的辯證法の上に立つ誤るべからざる科學説であると主張する。是に於てか我等の問はんとするところは、十九世紀に於て、果して科學なるものは、かくもマルクスをして社會哲學を編ましむるまでに進歩して居つたか如何と云ふ一事である。

◇社會科學より物理學へ

大凡社會科學の研究のため、その必要にして十分なる基礎は何處より之を携へ來るのであらう。これは科學的には心理學に行くより外に道はない。然らば心理學は何處より其基礎を求むるであらう、これは人間の生き行く原理を究むる生理學に行くより外に道はない。而して生理學は、その基礎を物理學に求める。何となれば生き行く原理も、物の動きの美妙の姿より外のものではないからである。誠にこの物理學こそ一切の科學の肝腎要めをなすものであり、その物理學の提供する宇宙觀なるものが、一切の科學的探究の基礎をなすものであつて、確固たる科學的の宇宙觀世界觀ありてこそ、その上に誤るべからざる人生觀を立てることが出來る。

◇思想的に纏まらぬ科學

然らばマルクス時代の物理學の提供せし宇宙觀なるものは、如何なるものであり しか、我等は先づ以て、之を吟味するを要する。十九世紀にあつては、物質それ自體を永恒の存在物と見た。而して物質以外に勢力（エネルギー）なるものが存在する。而して天界一切の虚空は、エーテルなるものが充滿して居る。この物質とエネルギーとエーテルの三位の存在を以て此天地宇宙を説明せんとした。而して此三種は互に如何なる關係に於てあるかは全く不可解であつた。して見るときにこれは所謂三位一體の宇宙觀ではなくして、實は三位三體の、ゴロ〳〵した纏り兼ねた物理學である。して見るときにこんな物理學の基礎概念の上に立ち、社會科學を建築するな

んと云ふことは實は不可能事と云はなくてはならぬ。マルクスの唯物史觀にはその識見に於て聽くべきところもあるが、その社會科學としての基礎は、甚だ危いものであつて、まだ〳〵中途半端であることを免れない。何となればその時代の科學が、所謂物質なるものを偏重した科學であつて、宇宙の根本に到達しかねて居つたからである。

◇單純偉大なる宇宙觀

何事も進歩する、同樣に科學も進歩する、今日の二十世記の科學は、殆んど革命的の勢を以て、物質の根本を闡明しつゝあることは寡に驚く許りである。物質は既にその素朴なる姿に於て見ることを能はず、これは單に陰と陽との電氣の、生々活動する姿である。電氣と云へば既に所謂物質ではなくして、エネルギーの一つの姿であることは、既に中學の生徒よく之を知る。さらばエーテルなるものにつき最近の

物理學者の主張るすところは如何。アインスタインは云ふた、我等は既にエーテルなるものを假定するを要せず、これは、陰と陽との電氣の生々と活動する場面であると。茲に於てか物質は既になく、又所謂エーテルなるものを假想するを要せず、我等の宇宙は、陰と陽との電氣として淳乎たるエネルギー、の生々と活動する場面であると見るときに、茲に十九世紀の三位三體の物理學は、二十世紀に於てエネルギー一元の、單純偉大なる宇宙觀にまで進出したことを知ることが出來る。

◇宇宙生命力

エネルギー一元の世界であるこの、エネルギーの故に、渾沌たる姿より、漸々に進化して今日の此整然たる世界を出現した。私は敢て整然たる世界と云ふ。そこに失業問題もあらうし、人種問題もあらう、されども今日の我等の世界は、まだ八十種の元素もないと云はれて居る星雲の世界より、遙に進歩したものと見なくてはなら

ぬ。かくも發展力を衷に藏して、渾沌たる極めて低級なるところより、整然たる高級の姿まで進化せしめた宇宙一元のエネルギーは、我等は之を何と呼んでよいのであらうか。これはもう單なる機械力と呼ぶべきではあるまい、單なる隋力の如き機械力では、生命どまで發展させる原動力はない、生命を陰陽二氣の衷に藏して、一切の無機界をなし、無機界を突破して、遂に有機界の出現を促し、遂にアミバーとなり、ヴオルヴオックスとなり、松となり、竹となり、鳥となり獸となつて、遂に萬物の靈長たる人類の出現を促せし力、この天地に潜みし宇宙力、我等は之を宇宙生命力と呼ばんとす。若しもこの力をしも稱して單なる機械力だと呼ばんとする人があるなら、我等は奮然として其名を爭はんとするのである。何となれば、單なる機械力は、是の如き創造力を姙めるものに非ざるが故に。

◇大生命の親を求めて

我等は此宇宙を、日に日に新しき價値を創造し行く大生命と見る、而して飜つてその大生命の根本を尋ね、玆に無限の歸順を表せんとするのが宗教の境地である。生命の親を尋ぬることが宗教の本旨である。新約聖書のヨハネ傳の第四章に

「神は靈なれば、神を拜するものは、靈と誠を以て拜すべき也」

と記されて居るが、我等は古今東西を通じて神を拜するの道として、この言にもまして剴切なるものを知らない。而して誰人かゝこの聖語を、三十一文字の我等の歌にて歌ふて下さつたなら、誠に日本國民として幸であらうと思ふ。かくと承知して明治大帝の、一々の御製を拜するときに、我等は左の一篇を拜承するのである。

目に見えぬ神の心に通ふこそ
人の心の誠なりけり

この御製は正に宗教心の極知に合致したものであつて、我等は新日本建設の要石として、斯の如き御製を有することを世界に向つて誇とするものである。

◇天道より人道へ

宇宙の根本は天地一貫の神である、而して宇宙の活動は、陰と陽との二氣より出發する。さらばこの天地宇宙を結ぶの道は何であらうか、我等は今當面の問題として此一事を考究したい。これは果して階級闘爭であらうか、憎みであらうか嫉みであらうか。否々天地宇宙が、陰と陽との電氣より出發するとき、陰陽相引き相勵ますのが天地の道であり、一言以て之を表現せんには、我等は愛と云ふ字にまして適切の字を知らない、愛と云ふ字は、心を受くとかく、受取の受の字の懐を開いて貰つて、こゝに心と云ふ字を入れゝば愛となる。私は今諸君に計つて、海軍の人は、國家の權威の下に、全世界の平和を謀るを以て任務とすると云ふた。「武」と云ふ文字は、戈と云ふ字と、止と云ふ字の合ひ字であるそうである。左傳なる書に、「戈を止むる之を武と云ふと論じられてある」そうであるが、寔に漢文字と云ふものは中々

面白いものである。假令ば「仁」と云ふ字の姿を見ても、その旁に上下二本の線を引きて、人間社會の結ばれ行く道を仁として示してある、孔子の教説を約言せば仁となる。又茲に、「茲」なる文字の左に石偏を置けば「磁」と云ふ字となる、これは正に引きつける石と云ふ意味である。愛の根本なる電氣と、磁石の力とは、昔は全く關係のないものだと思はれたが、今日に於ては磁石力なるものは、電力の一種の變形であることは何人も承知して居る事實である。而してこの磁石の磁の字の石偏を取つ拂ひ、茲の下に心を置くときに、茲にお釋迦さまや親鸞さんの待ちこがれて居る慈悲の慈の字に到達するのである。して見れば仁と云ひ慈悲の慈と云ひ、全然愛の字の一方面を表はしたものであることを知ることが出來る。

◇敬神愛人の道

日本は神の國であり、我等は畏れ多くも　上御一人を戴いて神の子であり孫であ

る。神の世界の大法は天地を結ぶ愛の法則の外にはないことは唯今述べた通りである。我等の日本は唯物史觀のよく説明し行くべき社會ではなくして、これは正に唯電史觀の境地を以て守るべき國家社會である。我等は單に此物質社會を超越して、山に入り寺にかくれて宗教の境地を行かんとするに非ず、よくも物質界を貫いて敬神愛人の生活を辿らんとするのである。今や日本建國二千五百年、東洋文化の粹を身に受けて、茲に西洋文化に當面したのである。願くば單なる唯物的の西洋思潮に眩惑せらるゝことなく、よくも之を貫いて更に高い文化に導かれたいものである。（了）

TECHNOCRACYよりELECTROCRACYへ

近頃亞米利加では、テクノクラシーと云ふ事が、たいへん流行するさうだ。朝起きれば直ぐに、グツト、モーニング、テクノクラシーと云ふのださうだ、お早やうテクノクラシー！

テクノクラシーと云はなければ、夜も明けないのかも知れぬ。

一體テクノクラシーとは何だ、これは嘸やクラシ好ゝ主義主義であらうか、今日迄は米國

では、デモクラシーと云ふ主張が吹き卷くつて、クラシイと云ふから、嘸や日本に適用しても暮しよからんと、大分力瘤を入れたものだが、その實それ程にはクラシ善くもなかつた、それもその筈、デモ！　とチヤント銘が打つてあつた。

デモクラシーが、民主主義であれば、テクノクラシーは、技術主義である。マルキストが勞働者獨裁を要求すれば、テクノクラシーは技術者獨裁を主張する。資本主義の崩壞後、之に取つて代るべきものは、此の技術主義なるテクノクラシーであると公言して居る。そして大の男のみが一日四時間づゝ、一週に二日働けば全米國は、今日よりも十倍樂な生活が營まれると宣傳されて居る。

テクノクラシーは、生活の標準を貨幣によることを廢して、直ちにエネルギー（勢力）を以て之に代へんとするのである。そして人間一人の力を、馬の力の十分一と換算する。これでは人間も馬も一所だ、味噌も糞も、區別がつかない。そんな主張は、矢張りデモクラシーにも增して、無差別惡平等であつて、決して健全な社會を打ち立てることは出來ない。

是に於てか余輩は、新しき主義主張を提供する、これは Technocracy に非ずして Electrocracy である。技術主義に非ずして、電氣主義である。歐米の一切の新思想が、無差別に出發するとき、余輩のエレクトロクラシーは、天地の大原則の上に立つて差別を要求する。而して差別即平等、平等即差別の、陰陽調和の世界を建てなんとする。余輩は全世界の識者に訴ふ。米國のテクノクラシーを棄てゝ、疾く〳〵日の本のエレクトロクラシーに來れ！　と。

昭和八年七月廿八日印刷
昭昭八年八月一日發行

定價 二十錢

著作者 東京市芝區白金今里町八九番地 田中龍夫
兼發行者 東京市荏原區戸越町一一五番地 林俊
印刷者 東京市荏原區戸越町一一五番地 明文堂印刷所
印刷所

發行所 東京市荏原區白金今里町八九番地 東京修養社
振替東京七八四九四
電話高輪四六四一

大賣捌 東京市麹町區九段坂 向山堂書房
振替東京六二七三二
電話九段三二九〇

書物を買いて神を見る

工學博士 田中龍夫著

科學の革新と哲學及宗教

再版

——▲四六版六百三十頁 總布裝幀函入▼——

定價 二圓五十錢
送料 十四錢

電子の發見！ 電子一元論！ 物質萬能主義は根底より覆され、數百年來の迷夢は醒めた。今や、哲學に宗教に有ゆる思想に旋風の如く二十世紀の眞理革命は叫ばれて居る。博士は其深遠の思索と、敬虔なる信仰と、熱烈なる研究の發表を此一書に鍾め之を公にされたものである。（發行所 警醒社）

仙波將軍の書翰の内

○老生は年七十四、全く老朽の一軍人に御座候。隱棲後哲學宗教等に關する書籍を耽讀いたし、所謂晴耕雨讀。消日まかり在り候ところ、是迄は是がために、さして刺戟感動を受けしこも覺へ居らず、加うるに永年の眼病、去年より病勢急轉直下、當春來全く失明、右方一眼辛うじて、明暗を辨じ得るほどの極度に相成候ところ、昨秋貴著『科學の革新と哲學及宗教』を拜讀しはじめ、何とも云ふべからざる興味を覺へ、一方の不自由の目にて、涙を流しながらも、强力なる電燈のもとにて、眼鏡の上に、更に擴大鏡を添へ、左手には黑色の定規を使用して、困難を以てやつと、三字乃至五六字を讀みつゝも、感銘感謝を深くし、何となく大宇宙に引上らるゝかの心持ちと相成、從つて又、人生に對しおのづから自覺なも生じ、猶又宗教上に就ては、兼ねてより既成宗教の、現在の社會に全く不適當なるを感知いたし居候儀につき御高論に依り、全く自身の歸向するところも了得し候やうに相覺へ、目下誠感誠喜、おくあたはず候。こと に科學專門の大家にして、議論高邁清新なる加うるに文章の妙、千頁になんなんとする全卷中我々ごとき頑陋無知の輩をして、さして疑ふところもなく、了解せしめらるゝ御腕前に至つては、恐らく今日我國の第一人れと相仰ぎ候。

東京修養社

工學博士　田中龍夫先生著作集

詩集

富士の如くに

—△四六判美裝三百頁▽—

富士の如くに！富士の如くに！

富士は日本の誇りである。東海の天にそゝり立つ富士は直ちに日本の姿である。富士を仰ぎ、富士を愛し、吾が日本の前途を祝し　世界に冠たる精神的日本の建設を高調した詩篇二百有餘。洗練、超脱の大文字。全卷悉く渺々として天來の聲そのまゝである。

特價　一圓
送料　八錢

詩集

天地生き活く

草木國土悉皆成佛は佛敎の語である。博士は廢殘の京都に佇み死灰の裡に立ちて天地今や『生』の力に溢れ『生』の喜びに躍るを體驗し、直ちに筆を呵して日本の復興を歌へる金玉の文字。

定價　一圓二十錢
送料　四錢

東京修養社

田中龍夫著

神の發見

神ありや無しや行き詰つた日本人を復活せしめんとせばたゞ此の一問題を解決せば足るりのである。神は有る！神は生きて我等と皆に在る。博士は神を發見した。只往今來忘れられた無價の寶珠を拾つた。しかもそれは物質のうちから、科學のうちからである所に博士獨特の神觀がある。

定價　二圓五十錢
送料　十四錢

田中龍夫著

物質觀の革命

物質に醉ひ、科學に毒された近代人に、目覺めよとの警鐘は即ちこの書である。

定價　一圓四十錢
送料　十六錢

田中龍夫著　（第九版）

物質主義之沒落

大阪放送局に於けるラヂオ講演を始とし、今日の滔々たる物質萬能主義に對して、革新せる科學的見地より戰を挑めるもの。詩あり女學校講演あり、平易に著者の主張を說く。

四六版　八十頁
定價　二十錢
送料　二錢

東京修養社

主幹 田中龍夫（科學、教育、宗教問題）

修養

毎月一回 十日發行
菊版 三十二頁
一部 拾五錢
前金 一ヶ年壹圓六十錢（郵税共）

純正修養雜誌（見本切手十錢）

今や東洋の一隅に介在せし日本、泰西の文化に接して六十年、竝に東西の兩文化、相合流して、新しき文化は開けんとす。此重要なる時期に際會して、今日の復雜せる思想海に掉して、我が日本の行くべき道を求めんと欲す。行文平易何人も之を手にして修養に資する得べし。

發行所 東京芝區白金今里八九 東京修養社
振替口座東京七八四九四番

（新刊三版）本間俊平先生述

現代教育と原動力

三五版 美本 七〇頁
定價一冊十錢 税二錢
（十冊 八十錢 税十錢）

文理科大學 岡本教授 序言

光は秋吉から來た。二百萬の都人士は今十年振りに來た。今や光を要めて集まつ問へつゝある。そしてその愛と熱と權威とに隨喜した。それはナザレのイエスよりは粗剛であつた。誠にイエスの精神を我が敷島の日本魂で行く嬉しさよ。

工學博士 田中龍夫著

電機設計の基礎

英文
定價五圓五十錢 送料（書留）廿八錢

電機設計と應用

定價 四圓 送料（書留）廿四錢

東京市芝區白金今里八九 東京修養社
振替口座東京七八四九四

東京修養社

物質を忘れて
神に行かんとするに非ず
物質を貫いて神に見えんと欲す

終